

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

56 ゼウオーラの涙

ニーダマと兵士たちは、ほとんど見えもしない光の渦の中心に向けて次々と矢を放ちました。ほんとうにまだザネリがいるのかどうかは誰にもわかりませんし、矢が届いているのかさえもわかりません。でも兵士たちはザネリの力を恐れ、矢が尽きるまで放ち続けようと思いました。

「やめよ、やめよーっ」

突然、ニーダマが叫びました。みながニーダマを、そしてニーダマの視線の先へ目をやります。あたりを包んでいた白い光が、薄くなっていました。

ニーダマがあぜんとした表情を浮かべ、一步一步、前へ進みます。

「王、様……」

ピーテルが、体じゅうに火傷を負ったエリユーが、続きます。

しやーっ！

白い闇の中から真っ赤な何かが現われ、目の前を横切りました。それをよけるために屈みこんだニーダマたちが顔を上げると、その真っ赤な何かの正体はつきりと姿を現しました。

それは、大蛇ゼウオーラが大きく開けた口から伸びた、ぶ厚い舌でした。大蛇のこはく色の眼が、ぎらりと光ります。大蛇は光の中心で大きくとぐろを巻いて鎌首をもたげ、ニーダマたちを見下ろしています。

「ニーダマ王様、大蛇に射かけますか……」

恐る恐る聞くピーテルに、ニーダマは首を横に振ります。

「矢は……通じまい」

「では、どうしたら……」

ニーダマにも、どうすればよいのかなんて、まるつきりわかりませんでし

た。再びまみえた大蛇のあまりの恐ろしさに、動くこともそれ以上声を出すこともできません。大蛇が襲ってきたら、きつと逃げることにすらできなかったでしょう。

ニーダマはただ、じつと待ちました。自分でも、何を待っているのかわかりません。もしかしたら、大蛇に殺されることを覚悟したのかもしれない。逃げ出せるすぎが訪れるのを、待っていたのかもしれない。

目をこらしても、魔王をやっつけることができただろうかともわかりませんでした。ただ、ニーダマはもうできることをやりつくしたのです。ただじつと、ニーダマは待ちました。運命が何を告げるのか、耳をすまし、両目を見開いて。

大蛇とにらみ合いが続き、永遠とも思える時間が過ぎました。大蛇は悲しげな表情を浮かべ、ニーダマたちをじつと見下ろしています。

大蛇は、とうとうニーダマたちを襲ってはきませんでした。みなをじつとにらみつけたまま、やがてその大きな体を小刻みに震わせはじめました。うろこのこすれる音が、じりじりと響きます。

もう、これ以上じつとはしてられない、逃げなければ喰われてしまう――。そうニーダマが思ったときです、大蛇がぐるりと巻いたとぐろの隙間から、赤い炎がちらちらと漏れてきたのでした。

「なんだ、あれは……」

考える間もなく、大蛇の大きな体が炎に包まれました。その炎は、燃えるものなど何もないはずの荒地一面にどんどん燃え広がってゆきます。ニーダマたちはもうなすすべなく、ただ後ずさるほかありません。

大蛇はただ、悲しい眼をしてニーダマたちを見つめています。

そしてそのとき、たしかにニーダマは見たのです。炎に包まれた大蛇ゼウオーラの大きなこはく色の眼から、大粒の涙が次々とこぼれ落ちるのを。そして、ぐるりと巻かれた大蛇の腹の下に、体じゅうに矢の刺さったザネリのなきがらが横たわっていることを――。

大蛇は炎の中で、焼かれもせず苦しみもせず、ただ悲しみにくれて涙を流し続けました。どんどん大きくなるいっぽうの炎は、やがて背後の山々を

も包み込み、世界を灼き尽くすがごとく燃え続けたのでした。

〈つづく〉